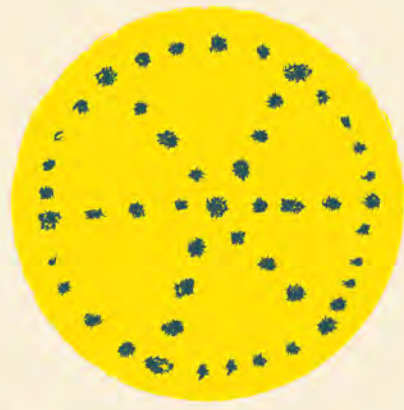


奈良時代の  
木簡



平城宮跡資料館  
令和3年度冬期企画展



奈良時代の  
木簡



わかたけ文様は  
なまぐさ色



奈良時代の  
木簡

# 平城宮 東方官衙 の調査

615 次

## 東方官衙とは？

平城宮内には、天皇のプライベート空間である内裏や、政治や儀式的中心となる大極殿・朝堂院といった施設以外に、行政の実務を担当する官衙（=役所）が建ち並んでいました。官衙は平城宮内のいくつかのエリアにまとまって配置されましたが、そのうち、第二次大極殿・東区朝堂院と東院地区との間にあった役所群を「東方官衙」と呼んでいます。

これまでの調査の結果、このエリアには、官衙建物が建ち並ぶ区画が複数存在することが明らかとなってきています。特に、第二次大極殿の真東で、内裏外郭に隣接した一等地にあたる 615 次の調査区には、東西 51m、南北 120m 以上と長大な規模の官衙区域があり、その区域中央には基壇の一部と考えられる高まりが現代まで残っていたことから特に重要な官衙があったと推定していました。今回は初めての面的な調査となりましたが、実際に調査を進めると、その高まりを残す巨大な基壇全体（SBI9000）が姿を現し、その SBI9000 の西南・東南に南北棟建物が新たに見つかりました。さらに調査区西側では南北に伸びる築地堀とその下を通る石組みの暗渠（通水路や排水溝）も確認できました。

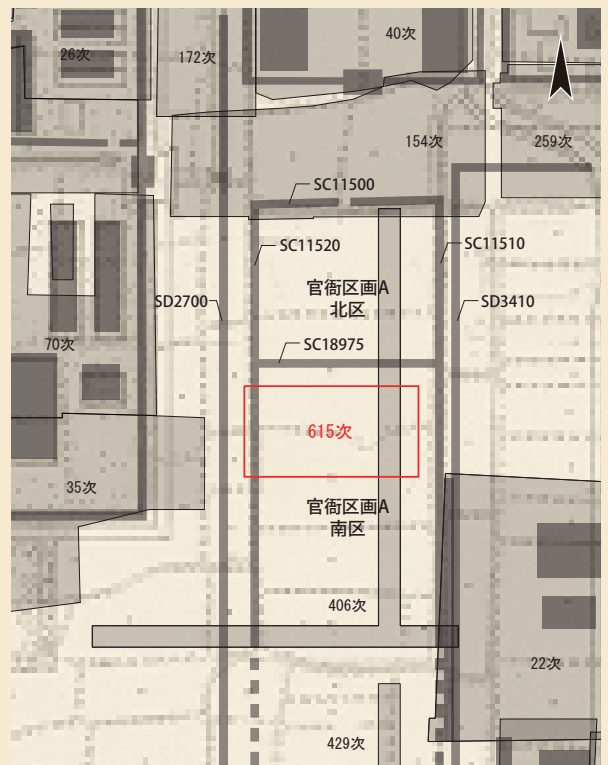


▲ 調査区全景 (北西から)

## 巨大基壇建物を発見！

SBI9000 は区画の中軸上に配置され、その平面規模は東西約 29m、南北約 17m の巨大なものであることが判明しました。基壇の大きさは大極殿や朝堂院に次ぐもので、平城宮の役所としては最大です。

また、基壇の南辺・北辺で計 6 か所の階段痕跡が見つかりました。特に注目を集めたのは、北面西階段の西半で階段の一段目の踏石や側面の石材を受ける地覆石などが奈良時代の原位置を保って出土したことです。一段分ではありますが、奈良時代の人を上り下りした階段がそのまま出現したのです。平城宮の建物跡で石材が再利用されないまま、まとまりをもって検出されるのはとても珍しいことです。さらに、SBI9000 の周囲一帯には粒のそろった小石（礫）が丁寧に敷きこまれ“舗装”されていた状況も見つかりました。



▲ 第615次調査区位置図



また、SB19000は築地塀で囲まれた区画の中軸の最も奥まった場所に配置されており、そのことはこの区画の中心をなす格の高い建物であったことを示します。既に見つかった南北棟建物（SB18980、SB18990）は、SB19000の脇殿と考えられ、今回の調査で新たに見つかった南北棟建物（SB20200、SB20210）は、SB19000と近接する位置にあります。この2棟は、SB19000とSB18980、SB18990とを近接あるいは接続させる建物と考えられ、何とも独特な空間構成となっています。

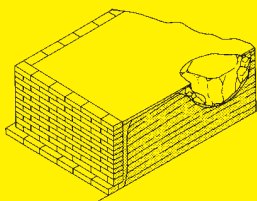
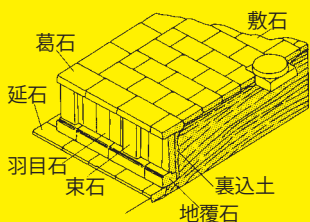


▲ 北面西階段の踏石と地覆石(北西から)

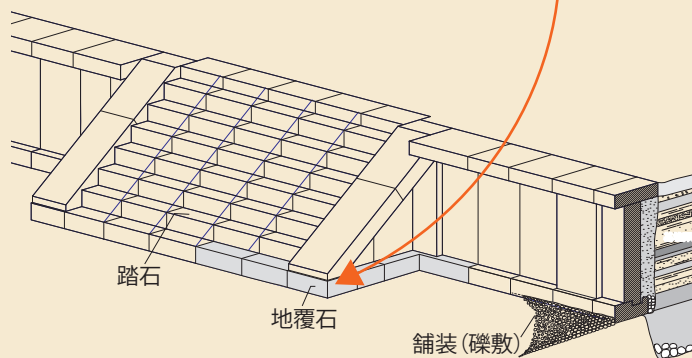
まとめ知識

壇上積基壇

磚積基壇



基壇外装には様々な種類があります。  
SB19000の基壇は「壇上積」にあたります。

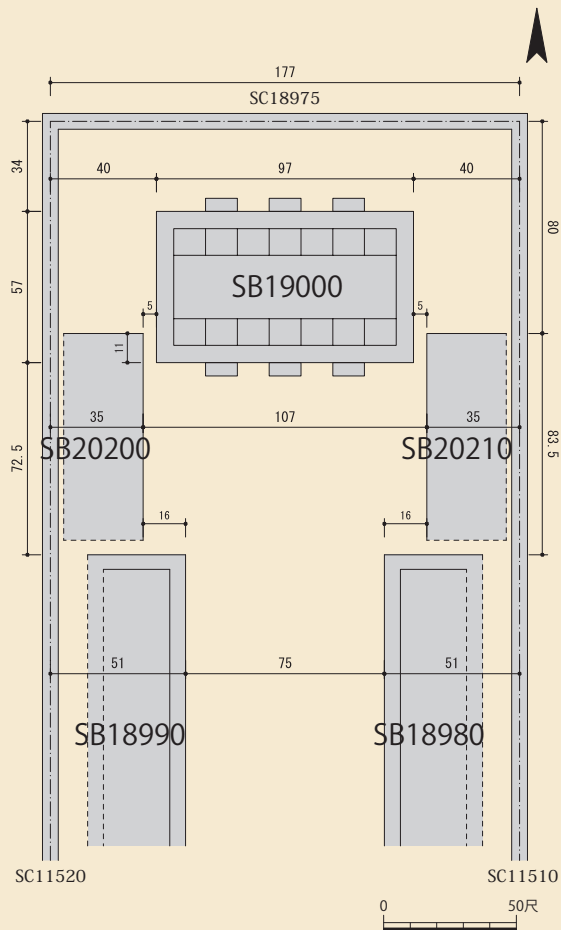


▲ SB19000の基壇外装と北面西階段の復元図

## 巨大な建物群の正体は？

巨大な基壇、周囲の舗装、独特の空間構成…これほど立派な正殿をもつ建物群は一体どの役所のものだったのでしょか。しかし、今回の調査で墨書土器や木簡などその直接的な手掛かりは出土しませんでした。ただし、基壇の規模からみても、平城宮の中でトップクラスの役所に相当することは間違いありません。平城宮の在り方をある程度踏襲していると考えられる平安宮や調査地付近の木簡の出土状況などを検討すると、現時点では太政官関連官司（だじょうかん 弁官曹司）である可能性が高いと考えられています。弁官曹司とは現代の内閣官房のような政治の中枢にかかわる役所です。この東方官衙は現代日本でいうと霞が関のような位置づけであったと言えます。

今後のさらなる調査で、東方官衙の全貌に一步一步近づいていくことでしょう。

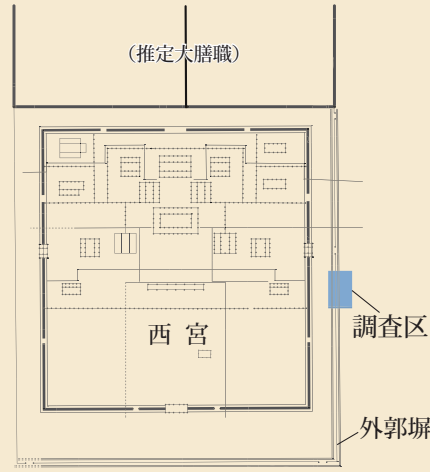


▲ 官衙区画配置復元図(単位:尺)

平城宮  
第一次大極殿院  
東方  
の調査 612 坪

平守の堀

第一次大極殿院地区の遺構は、大きく3つの時期に分かれます。Ⅰ期は奈良時代前半(第一次大極殿院の時期)、Ⅱ期は奈良時代後半(称徳天皇の西宮の時期)、Ⅲ期は平安時代初期(平城太上天皇の西宮の時期)です。調査地は、奈良時代には、第一次大極殿や称徳天皇の西宮の東側にあたり、平安時代初頭には、平城太上天皇の西宮の東外郭堀があったとされる場所です。



▲ 平安時代初期の遺構



▲ 調査区全景(南東から)

調査の結果、想定どおり、平城太上天皇の西宮(Ⅲ期)の東外郭堀と考えられる掘立柱堀と、それともなう素掘溝2本が見つかりました。堀の柱間寸法は従来の調査成果よりもばらつきが大きいことがわかり、平安時代初期の造営の実態を知る上で貴重な情報が得られました。

一方、奈良時代の遺構は少なく、第一次大極殿院(Ⅰ期)や称徳天皇の西宮(Ⅱ期)が営まれた時期には、空き地として保たれていた可能性が高いことを再確認しました。

平城京  
左京  
二条二坊十一坪  
の調査 611 坪

特殊な空間

平城京左京二条二坊十一坪は、坪の北西隅が平城宮(東院)と接しており、平城宮域に大変近い場所です。また、これまでの坪の北半の発掘調査では、正殿、後殿とされる東西棟建物とまわりに「コ」の字状に配置された建物群が見つかりました。また、緑釉磚や施釉製品が数多く出土し、平城宮の外でありながら官衙(=役所)的な性格を持つ建物群として評価されてきました。

これまでの調査で見つかった正殿は、坪の南北中軸上に位置すると想定し、間口7間、奥行4間の規模で、北と南に廂がつく二面庇建物であると推定しています。この正殿の南廂柱列から約19m南に正殿・後殿と柱筋を揃える柱穴列が見つかりました。柱の掘方は一辺が約1mと大きく、正殿の廂柱や後殿の柱に匹敵します。

今回見つかった柱列は、正殿、後殿とともに一連の建物群の一部である可能性が高く、坪の南半付近まで建物群が展開していたことがわかりました。これらの建物群は、遺物や遺構の重複関係から奈良時代前半(天平年間以前)の建物群と考えられます。



▲ 正殿・後殿と柱筋をあわせた柱穴列(西から)

まとめ知識

二面庇とは…

二面庇(ひさし) (小型の屋根)が身舎の両面につくものをいいます。



## 興福寺境内

の調査

625 号

## 藤原氏の氏寺

奈良時代はじめ、<sup>ふじわらの ふ ひ と</sup>藤原不比等が平城京左京三条七坊の地に藤原氏の氏寺として建立したのが興福寺です。以来、たび重なる火災を乗り越え、今日まで法灯をつないできました。ただし、創建当初の中心伽藍<sup>がらん</sup>には江戸時代の火災（1717年）以後、再建されなかった建物も多くあります。

興福寺では、1998年に「興福寺境内整備構想」を策定し、かつての寺観を取り戻すための整備を進めてきました。奈良文化財研究所は、発掘調査を通して中金堂院をはじめ伽藍の整備に必要な情報を提供し、この整備事業に協力しています。今回の発掘調査もその一環で、梵鐘<sup>ぼんしやう</sup>を吊り、時を告げる鐘楼<sup>しょうろう</sup>と、東金堂・五重塔をかこむ区画施設の構造解明を目指しました。



▲ 興福寺鐘楼基壇(北西から)

## 袴腰をもつ鐘樓の発見！



▲ 『春日本・春日権現験記』に描かれた興福寺鐘楼(春日大社所蔵)

袴腰にはその基部を支える石材がともなうため、袴腰をもつならば、発掘調査では基壇上で基礎石材かその抜取溝をみつけることができるはず。鐘楼の基壇上の溝は、まさに袴腰の基礎石材を抜き取った痕跡と考えられるのです。しかも袴腰基部の大きさは、史料にある奈良時代鐘楼の規模と合致します。袴腰を備えた鐘楼の現存例は平安時代末のものが最古ですが、それが奈良時代にまで遡る可能性を示す、建築史上も重要な発見となりました。

発掘調査により鐘楼の規模は間口3間（10.1m）、奥行2間（6.5m）と判明しました。これは大安寺や薬師寺といった奈良時代の国家寺院にも匹敵する大きさで、興福寺の寺格の高さを窺わせます。

注目の発見は、基壇上の四周をめぐる溝です。古代寺院では類例がないため評価が難しいところでしたが、その性格を知る手がかりは絵画史料にありました。興福寺鐘楼は中世以降、下層部分がはかまごし袴腰とよばれるスカート状の構造で描かれます。

## 五重塔の前には門があった

今は見ることはできませんが、かつて東金堂・五重塔は回廊に囲まれ、それぞれの前面には門が開いていました。発掘調査によりこの門が間口3間（8.6m）、奥行2間（4.7m）の八脚門<sup>はっしやくもん</sup>であったことがわかりました。東金堂院も幾度かの火災を経験しており、今回発見した門は鎌倉時代ごろに再建されたものとみられます。ただし、礎石の据え直しが確認できないため、創建以来の位置や規模を踏襲してきた可能性が高いでしょう。このほか、五重塔の南側では興福寺の南面築地塀の存在を初めて確認し、これからの境内の整備に寄与する成果があがりました。



▲ 五重塔前の門跡(西から)



## 何に使った？ 須恵器白

### 奈良時代の台所用具！

平城宮・京をはじめとする古代の遺跡では、「すり鉢」・「こね鉢」と呼ばれる須恵器がときどき出土します。しかし、この須恵器は鉢の開きが狭く、搗り目もありません。結論を先にいえば、これらは『延喜式』に見える「陶臼」、つまり須恵器の臼であったと考えられます。しかし須恵器臼は、いったいどのように用いたのでしょうか。ここでは平城京で出土したそれらを紹介し、使用法を考えてみましょう。

### 中国・韓国・東南アジアの国では？

平城京左京三条二坊の溝（SD4750）や、二条大路の濠状遺構（SD5100・SD5300）で出土した須恵器臼は大型品で、底部内面がすり減ったものもあります。長屋王家木簡（SD4750 出土・霊亀3年頃）にも「陶碓」という器名が見え、この種の須恵器臼を指したと考えられます。奈良時代の人々にとって、これらは調理用の台所臼であったのでしょう。

現代の中国では、「蒜臼子」という台所臼を使用しており、韓国では「チョルグ」といいます。東南アジアでは、陶製や石製の台所臼がハーブやスパイスの加工に不可欠だそうです。アジア各地における台所臼の使い方も参考にすると、古代の須恵器臼も「搗く」調理に用いられたのでしょう。須恵器臼の使い方をよく知らないのは、アジアでは日本人くらいかもしれません。

須恵器臼は焼き物なので、使っているうちに割れてしまうのではと心配になります。そこで、須恵器臼の使用法や耐久性を明らかにするため、再現須恵器を用いた使用実験を現在続けています。再現品は岡山県の陶芸作家さんに作っていただきました。使い始めておおよそ半年が経ちましたが、ニンニクやショウガなどを搗きこなすくらいではびくともしません。台所臼としての耐久性は、十分に証明されたと考えています。



▲ 須恵器臼（平城京左京三条二坊・二条大路出土）



▲ 中国で使用されている「蒜臼子」



▲ 韓国で使用されている「チョルグ」



▲ 再現須恵器を用いた使用実験



再現須恵器  
岡山県陶芸作家さん



## 平城宮・京出土 の あそび道具

### 役人がこっそり あそんだ？

平城宮・京からは古代の人々が楽しんでいた盤上遊戯（ボードゲーム）に関わる道具が出土しています。

サイコロには現代でもおなじみの六面体のものと、棒状のものがあり、六面体のサイコロは双六に使用されたと考えられます。角材を利用した大型のものや、対面する目の和が「7」にならないものも。棒状のサイコロは側面を削った角柱形で、各面に墨書や刻線により数を示しています。

「かりうち」は近年研究が進められている古代の盤上遊戯です。1968年の調査で出土した遺物を再整理したところ、外面に墨で盤面を記した一例を確認しました。

黒色や白色を呈する丸みを帯びた天然の小石は、碁石のほか双六やかりうちの駒として使用されたと考えられます。

これらをみると、平城宮・京に暮らす人々は木片や土器、小石など身近にある材料を加工・転用して娯楽に興じていた様子が浮かんできます。



▲ 碁石(平城宮・京出土)



▲ サイコロ(平城宮・京出土)



▲ 列点墨書土器  
(平城第43次調査出土)



▲ 再現須恵器を用いた盤面

## めずらしい 竹尺

### 何をはかった？

平城宮の東方官衙地区の廃棄土坑から、竹尺の断片が9点見つかりました。竹尺には、「分（約3mm）」、「5分（約1.5cm）」、「1寸（約3cm）」の目盛が線刻されており、刻線には墨がはいります。9点の断片には11寸分の目盛を確認することができました。これは、もともとが1尺（=10寸、約30cm）の物差だったとすれば2本分となりますが、正倉院の木尺や平城宮・京から出土した遺物を参考に1.5尺の物差として復元しました。さらに、1か所、1寸の目盛上に矢印のような記号が墨で書かれており、他の類例から、「5寸（約15cm）」を示す目印であると判断しました。



▲ 竹尺(平城宮東方官衙地区出土)

### はじめて見つかった！

これまでに平城宮で確認されている物差は、ヒノキやウツギなどの木製で、竹製の物差を確認したのは今回が初めてです。平城宮では木製品に比べ竹製品の出土は少なく、この資料は平城宮内で竹製品を用いていたことを示す貴重な事例です。この竹尺の背面には、不鮮明ですが墨書の痕跡があります。もしかすると、持ち主の名前が書かれていたのかもしれませんが。現代の私たちも当たり前に使っている竹尺が奈良時代からあったと考えると何だかわくわくしますね。





# よみがえった 唐花文鬼瓦

## 平城宮の鬼瓦

仏教とともに瓦屋根が伝わった当初は、蓮華文の鬼瓦が用いられていましたが、平城宮の造営を機に鬼面文の鬼瓦が製作されるようになります。平城宮では鬼面文鬼瓦がこれまでに約 1000 点出土しています。しかし、鬼でもなく7世紀までの蓮華文とも違う文様の鬼瓦もわずかながら出土しているのです。

### 3D計測を活用！

今回紹介するのはその中の一つで、中央に花文を、その周囲に蔓草を配し、さらに周縁部に唐草文と珠文帯を廻らせた鬼瓦です。しかし、12 片しか出土しておらず、しかも出土した破片はどれも摩滅がひどいものでした。なかなかかりし日の姿をイメージできないため、すべての破片を3D計測し、欠けた部分を補ったり、摩滅の少ない個体の状況を全体に反映させたりして、製作当初の姿を復元し、レプリカを製作しました。

復元した鬼瓦の大きさは、全長 31.8cm、下端幅 27.7cm と小ぶりでした。周囲の唐草文帯や珠文帯の端正な造りに対し、中央の花文や蔓草のデザインは軸がぶれたり、歪んだりしており、全体として稚拙な雰囲気も感じます。しかし、中央に大きく花を配し、周囲を蔓茎と葉で囲む文様は、唐代で盛行し、奈良時代に日本に伝わった唐花文をイメージしたものであると考えられます。似た構成のものとして、大宰府で出土する文様磚があげられます。

この唐花文鬼瓦は平城宮の東方官衙地域で集中して出土します。大型の鬼面文鬼瓦は大極殿をはじめとする大規模な建物の屋根に用いられるのに対し、こうした小型の鬼瓦は小規模な役所や築地塀の屋根を飾ったのかもしれませんが。建物の格によって鬼瓦は使い分けられていたのでしょうか。様々な文様が屋根を飾る平城宮の景色を想像して見ると楽しいですね。



▲ 完成した唐花文鬼瓦のレプリカ



▲ 唐花文様磚(九州歴史資料館所蔵)

### 調査位置図



▲ 平城京(平城宮周辺を拡大)



▲ 奈良時代後半の平城宮

2022年2月11日

編集・発行 独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1

印刷 (株)天理時報社

〒632-0083 奈良県天理市稲葉町 80 番地